

一宮市馬見塚遺跡における立地と 遺跡形成についての覚書

● 川添和暁・鬼頭 剛

一宮市馬見塚遺跡は、尾張低地帯に立地する遺跡として、学史的にも知られた著名な遺跡である。当地域の縄文時代後晩期の遺跡が散発的な状況を示す中、馬見塚遺跡では、遺構・遺物の出土など遺物包含層の様相が群を抜いて濃密であり、この遺跡の様相の解明および評価は、当地域の縄文時代後晩期を語る上で必須である。筆者らはこれまで公表されている調査・研究成果をまとめる作業から開始した。本稿では遺構・遺物出土の様相を把握する一方で、地質学的立場からの表層地形解析結果を重ね合わせた。その結果、縄文時代後期後葉から弥生時代に至るまで、一貫して遺跡内のくぼ地際に遺跡が形成されていることが判明し、晩期中葉以降は同時に2ヶ所で形成が行なわれている様子を明らかにすることができた。

1. はじめに

愛知県西部、犬山扇状地から尾張低地帯にかけては、散発的ではあるが縄文時代の遺跡の存在が確認されている。愛知県の西部には完新統からなる濃尾平野が広がり、陸側から海側（伊勢湾）にかけて扇状地から三角州に至る地形の変化が認められる。完新統のつくるこれらの地形の上には、散発的ではあるが縄文時代の遺跡の存在が確認されており、縄文時代中期末には既にヒトの活動痕跡が所々で確認されているものの、より安定して遺跡の存在が確認できるのは縄文時代後期後半以降と言えよう。

本稿では、この地域の縄文時代晩期の遺跡の中でも、馬見塚遺跡を特に取り上げたものである。馬見塚遺跡は当地域における屈指の縄文時代晩期遺跡でありながら、遺跡全体の様相が不明瞭であることによる。この遺跡の形成状況を含めた遺跡構造を理解することは、当地域のみならず、周辺遺跡の様相をも併せて、縄文時代晩期の地域社会の一樣相に迫り得るものと考えられるのである。

本稿では、考古資料のデーターの整理と、地質学的地形解析とを組み合わせたものである。前者は川添が、後者は鬼頭が行なうものである。なお、考古資料データーはこれまで公表されている情報の整理をまずは試みた。

2. 馬見塚遺跡に関わる研究小史

ここでは、馬見塚遺跡に関する研究史を概観する。ここでは、今回話題とする、馬見塚遺跡の立地や遺跡形成の様相についての記載について、整理したい。

a. 遺跡発見から資料報告

馬見塚遺跡を初めて発見したのは、森徳一郎である。大正時代末の当時までは、尾張国一宮である真清田神社の創建を奈良時代以降と一部で考えられていたことに関連して、平野内に遺

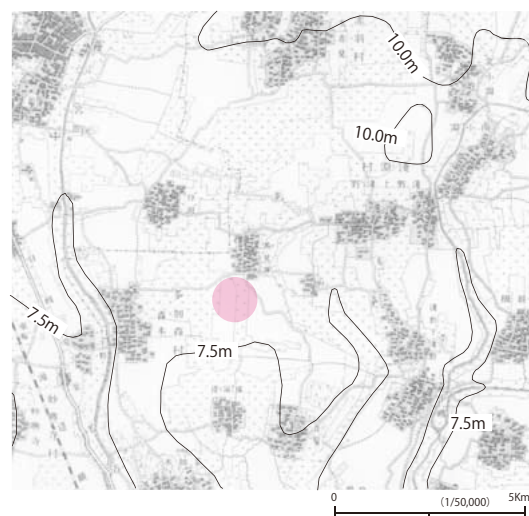


図1 馬見塚遺跡位置図
(明治24年陸地測量部作成二万分の一地形図「一宮町」より)

跡は存在しない、とされていた。しかし、大正 15 年に神社東方では馬見塚遺跡が、西方では萩原町二タ子遺跡が発見され、平野の形成が古くまで遡ることが認識されるところとなった（森 1929:30～31 頁）。しかし、遺跡の確認は、後世の木曾川などによる二次的堆積による可能性が指摘されるほど、当時としてはある意味常識外のことであったようである（上羽 1926:431 頁）。馬見塚遺跡の包含層からは石冠を含めて多量の土器・石器・石製品が出土したようであるが、同時に遺構としては土器埋設遺構【土器棺墓】が「数十箇」見つかった（森 1931）。合口が認められたこともあり、森は九州地域の甕棺墓との関連性を想定した。この地点は、現在、馬見塚 A 地点と言われる位置にあたる。『新編 一宮市史』には、土器棺墓の出土状況の詳細について、森の未刊行原稿が掲載されている（澄田・大参・岩野 1970:38・39 頁）。A 地点内の土器棺墓（甕棺）の出土を 4 地点に分けた報告文である。第一号地は合口 2 基で、耕作土を出した後の水田下一尺五寸（約 45cm）のレベルに位置していたとする。第二号地は合口 1 基で、田面下二尺（約 60cm）のレベルで見つかった。第三号地は単式が 2 基で、1 基は畑面下三尺八寸（約 1.15m）の深さで、別の 1 基は畑面下三尺二寸（約 97cm）の深さであった。第四号地は単式 1 基で、畑面下三尺九寸五分（約 1.19m）（田面下一尺四寸五分（約 44cm））の深さからの出土であった。

林 魁一は、馬見塚遺跡の字郷前と字三反田では、性格を異にすることを指摘した。広大な遺跡範囲における形成差を初めて指摘したものと考えられる。前者は縄文土器・石器を、後者は弥生土器（古式土師器）・曲玉・管玉が出土したとする。弥生土器（古式土師器）なども畑地下一尺より六尺くらい（約 30cm～1.8m）の沖積土中の出土とした（林 1927:61 頁）。森は、この三反田地区について馬見塚遺跡の範囲外に考えているようであり、縄文時代を主体とする字郷前を中心とする区域に限定していたようである（森 1931:43 頁）。また、大場磐雄は、この三反田地区について、石製模造品の存在などから祭祀遺跡とした（大場 1938:236 頁）。

以上の状況を整理・報告したのが、小栗鉄次郎である（小栗 1942）。小栗は、土器棺墓の出土が知られていた、字郷前を中心とする東西 280m・南北 180m に渡る地点を A 地点、字三反田を中心とする地点を B 地点と整理した。遺物の出土状況についての報告もある。当時は石鍬の表面採集が可能であったこと、A 地点から出土した石剣数点は土器棺墓とともに道路面から 90cm の下位、田面より 45cm の下に並列して置かれた状態で出土したことが記されている。5 号地とした東見六の地点では、上から第一層:耕作土（93cm）・第二層:粘土層（17cm）・第三層:黒色腐植土（27cm）・第四層:砂交赤斑点土（35cm）、以下、細砂層という堆積が確認されており、土器は第三層・第四層に埋もれていたという（同:29～30 頁）。

b.『新編 一宮市史』と範囲確認調査

太平洋戦争後の昭和 28（1953）年、当地の土地改良工事中に多量の遺物の出土から、遺跡保存の機運が高まり、名古屋大学澄田助教授（当時）の指導のもと、遺跡顕彰会の組織と、馬見塚出土品陳列館の開設を経て、昭和 29（1954）年には県指定史跡に指定されたという（岩野・能登 1975:3 頁）。

昭和 35（1960）年、一宮市史編さん事業が開始し、昭和 45（1970）年に『新編 一宮市史 資料編一 縄文時代』（以下、これを『資料編一』とする）が刊行となった（澄田・大参・岩野 1970）。本書は、現在でも馬見塚遺跡を知るための基礎文献であるばかりではなく、立地記載に地形・地質学的な研究成果の導入や、調査成果の提示の手続きなど、今日的に参考になる点が多い。

1950 年代後半～60 年代にかけては、地盤沈下・災害・都市開発などで、沖積地に対する地形・地質学的な研究成果が多く出されていた時期のようである*。『資料編一』に先行して刊行された『資料編三』では、尾張平野の地形の特徴が既に記されている（井関 1963:41～42 頁）**。『資

* 1970 年代の自然堤防の研究動向については、井関弘太郎『三角州』（井関 1972）、籠瀬良明『自然堤防』（籠瀬 1975）などを参考にした。

** 後に『新編一宮市史 本文編 上』の中で、より詳細に論じている（井関 1978）。

料編一』でも尾張平野の特徴として、東北高地部から西南低地部にかけて、木曽川扇状地帯・自然堤防帯・低地帯の三地形面に区分でき、当地域の縄文時代遺跡は、自然堤防と後背湿地による表層微地形からなる自然堤防帯に立地することを特徴とした（澄田・大参・岩野 1970：8

頁）。このように縄文時代遺跡立地における自然堤防という概念の導入は、考古学の分野では1970年代以降に広く言われるようになったようで（渡辺編 1975、渡辺 1978）、『一宮市史』はその先駆けであったと言えよう。その上で、『資料編一』では、これまでの調

層 序	層 厚 (ca.)	色 (dry) 調	土 性	備 考
I	30cm	10YR6/3 pale brown	Sandy loam 砂壤土	表 土 層
II	30cm	10YR6/4 light yellowish brown	Loam 壤土	漸 移 層
III	55cm	10YR4/1 dark gray	Loam 壤土	遺 物 包 含 層
IV		10YR7/3 very pale brown	Sandy loam 砂壤土	基 盤

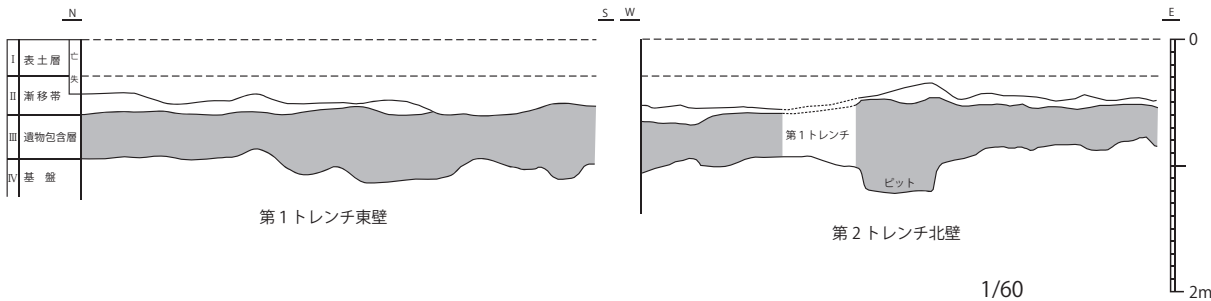


図2 馬見塚F地点の土層断面図および遺構位置図（澄田・大参・岩野 1970 より改変）

査を整理し、かつ新たに行なわれた発掘調査成果をも合わせて、調査年次順に A～G 地点と称した。これが現在、広く使われている地点名である。A 地点は森徳一郎の報告した地点、B 地点は三反田地区にあたる。当時、馬見塚遺跡周辺では畑の土取り工事がしばしば行なわれたようで、遺物の出土を受けて緊急に調査を行なった場合が多かった。特に F 地点の調査は、土器棺墓 5 基・焼人骨を含む土坑・炉跡などが見つかり、馬見塚遺跡を代表する調査事例となった（図 2）。E 地点・F 地点については、土層断面図の提示がされている。F 地点では、地表下 60cm のレベルで、遺物包含層である褐灰色シルトが 55cm の厚さで確認された。この調査では、土器・石器のみならず、土偶・石製垂飾など、多様な遺物の出土をも見た。なお、大参義一は、縄文時代晩期後葉から弥生前期への土器型式の変化を示すなかで、F 地点に続くほぼ一時期の資料を多く含むものとして、D 地点出土土器群の詳細を提示した（大参 1972:168～172 頁）。

昭和 48（1973）年、馬見塚遺跡の範囲確認調査が行われ、その成果が公表された（岩野・能登 1975）。馬見塚遺跡全体を網羅的に行なわれた調査は、現在この調査のみである。報告の中で特に注目すべき点として、現状で確認できる微地形では、後背湿地を挟んで南北に長い自然堤防の高まりで 2 ケ所に分かれることを、明治時代の地籍図を用いて指摘した点である（図 3）。これは、馬見塚遺跡の遺跡形成地盤が一樣ではないことを示唆するものである。調査区設定は、2×2m の試掘坑（報告ではグリッド



図 3 馬見塚遺跡付近の明治時代地籍図
（岩野・能登 1975 より引用）
編目部分は自然堤防を示す

と呼称)を、西側自然堤防で 38 ケ所 (W-1～38)、東側自然堤防で 68 ケ所 (E-1～68) の、計 106 ケ所を設定して行なわれた。基本層序は I～V 層に分かれ、そのうち IV 層とした黒色有機質土層が縄文時代晩期の遺物包含層で、40～50cm の厚さを確認したとある（図 4）。遺構としては、土器棺墓・土坑の検出があった。最後に、報告では、縄文時代晩期の遺物は東西二列の自然堤防でほぼ全域に渡って確認できたとし、遺物の出土状況から、土器棺および土壇（ママ）が集中する墓域的様相と、包含層を形成する生活的様相の二者に分かれると指摘し、両者の差は平面的あるいは現地形の標高差でも傾向を辿ることができるとした。

また、これらの調査の後、1982 年に D 地点南の地点から後期宮滝式の土器が多量に出土したとある（岩野 1985:83 頁）。本稿では当地点を、仮称（旧）ハッカ地点とした*。

c. 増子康真による調査

馬見塚遺跡では、1950 年代以降も水田化などの土取り工事がしばしば行なわれたことは、上述した通りである。馬見塚遺跡出土遺物の収集に力を注いだ研究者の中に増子康真がいる。増子はその出土状況などをもって出土土器群の一括性などを自身で確認して、当地域の縄文時代晩期の土器型式設定の基礎資料とした。その成果は、『考古学手帖』・『古代学研究』・『古代人』などに発表して、増子の研究成果は、東海地域以外の研究者にも広く知られるようになったといえる。この一連の調査で設定された土器型式には「又木式」・「西之山式」・「馬見塚式」がある。増子は、論文に地点名を記しているが、これは増子自身が土器の出土を確認した地点名であり、A 地点から I 地点までである。『資料編一』で称された地点名と区別するために、本稿では増子確認・採集地点名を Ma-A～Ma-I の名称で表現することとする。

まとまった報告の初出は、『考古学手帖』に掲載された論文であろう（増子 1963）。Ma-A

* 『資料編一』の掲載資料は、佐藤丈夫・上田八尋・安達厚三・山崎真臣・新井喜久夫・清水雷太郎など、多くの人の遺物採集活動によるものである。なお、（旧）ハッカ地点の遺物採集は、寺川光夫の尽力によるところが大きい。

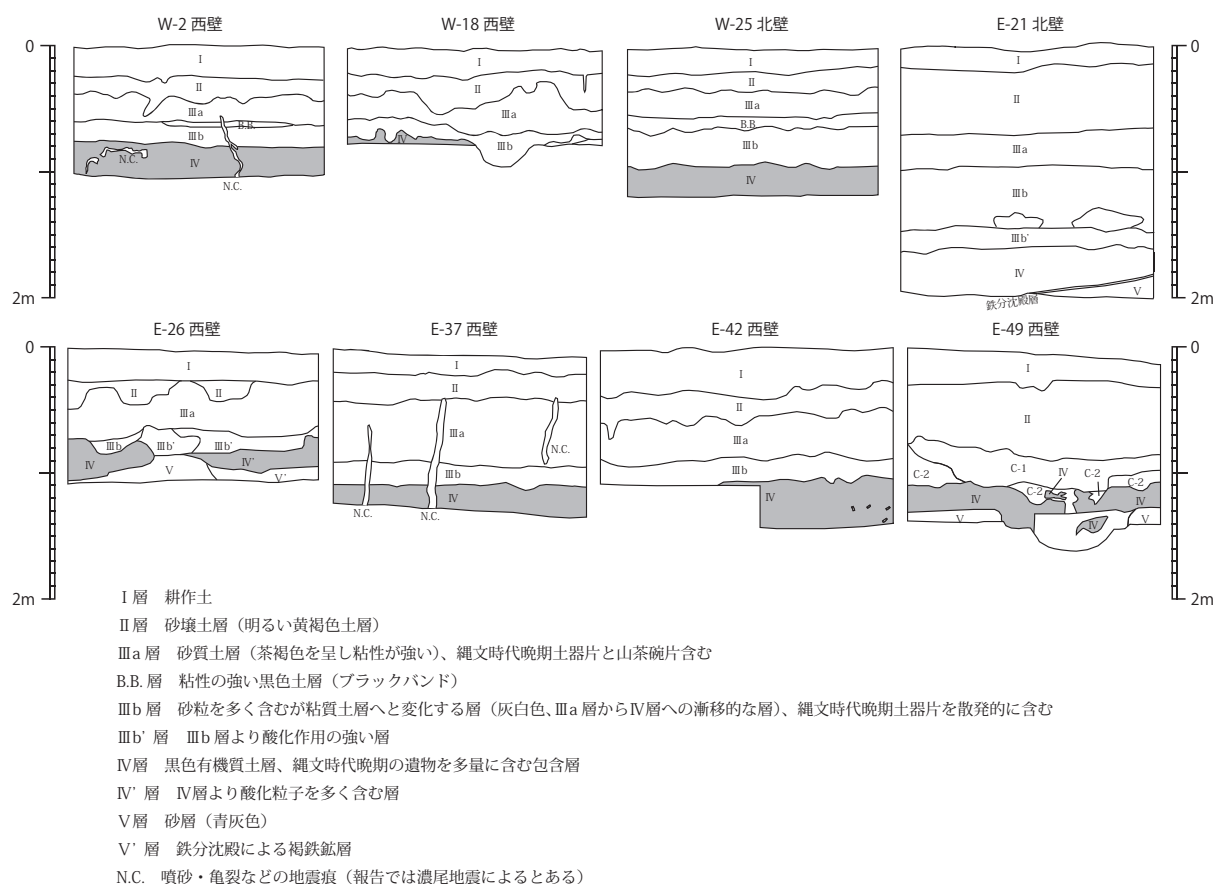


図4 馬見塚遺跡範囲確認調査土層断面図 (1:60) (岩野・能登 1975 より改変)

地点から Ma-G 地点まで地点名を付け、Ma-B 地点・Ma-C 地点・Ma-D 地点・Ma-E 地点の出土土器について図示を行なった。Ma-B 地点で五貫森式、Ma-C 地点で下層が宮滝式、上層で弥生前期、Ma-D 地点で晩期中葉、Ma-E 地点で晩期後半をそれぞれ主体とする遺物が出土したという。遺物は土器と石器・石製品 (石鏃・石錐・異形勾状小石器・打製石斧・磨製石斧・凹石・軽石・石剣・石棒)、遺構としては土器棺墓を確認したとある。その後、この馬見塚遺跡出土土器を用いて、稲荷山式→西之山式→五貫森式→馬見塚式→樫王式という晩期中葉以降の土器編年について提示をした (増子 1965)。また、Ma-I 地点では、長さ約 6m・幅約 70cm・深さ約 50cm の溝状遺構が検出され、埋土中から集中して晩期前半の資料が出土した。増子はこの土器群を又木式と命名した (増子 1981:84 頁 (初版 1975))。なお、紅村弘が著した『東海の先史遺跡』に掲載されて

いる仮称 C 地点および D 地点は、本稿の Ma-C 地点・Ma-D 地点に相当すると考えられる (紅村 1963:71~74 頁)。

d. 馬見塚 H 地点の調査

平成 5 (1993) 年、設楽博己らによって学術調査が行われ、その成果が公表されている (設楽ほか 1995)。調査地は G 地点に道路を挟んで北側に接続する地点で、H 地点と称された。当地は遺跡中央の後背湿地から東側自然堤防にかかる位置にあたる。調査では、後背湿地側から自然堤防にかけての地点に A トレンチ (6.5 × 2m)、東側自然堤防上に B トレンチ (4 × 2m) を設定、発掘調査を行ない、かつこの H 地点の東西方向に馬見塚遺跡全体を横断するラインで、9ヶ所のボーリング試料の採取が行なわれた。

A トレンチの大別層序は、1 層から 5 層に分けられ、5a 層が縄文時代晩期の遺物包含層であるという。遺構は溝が 1 条見つかった。報告

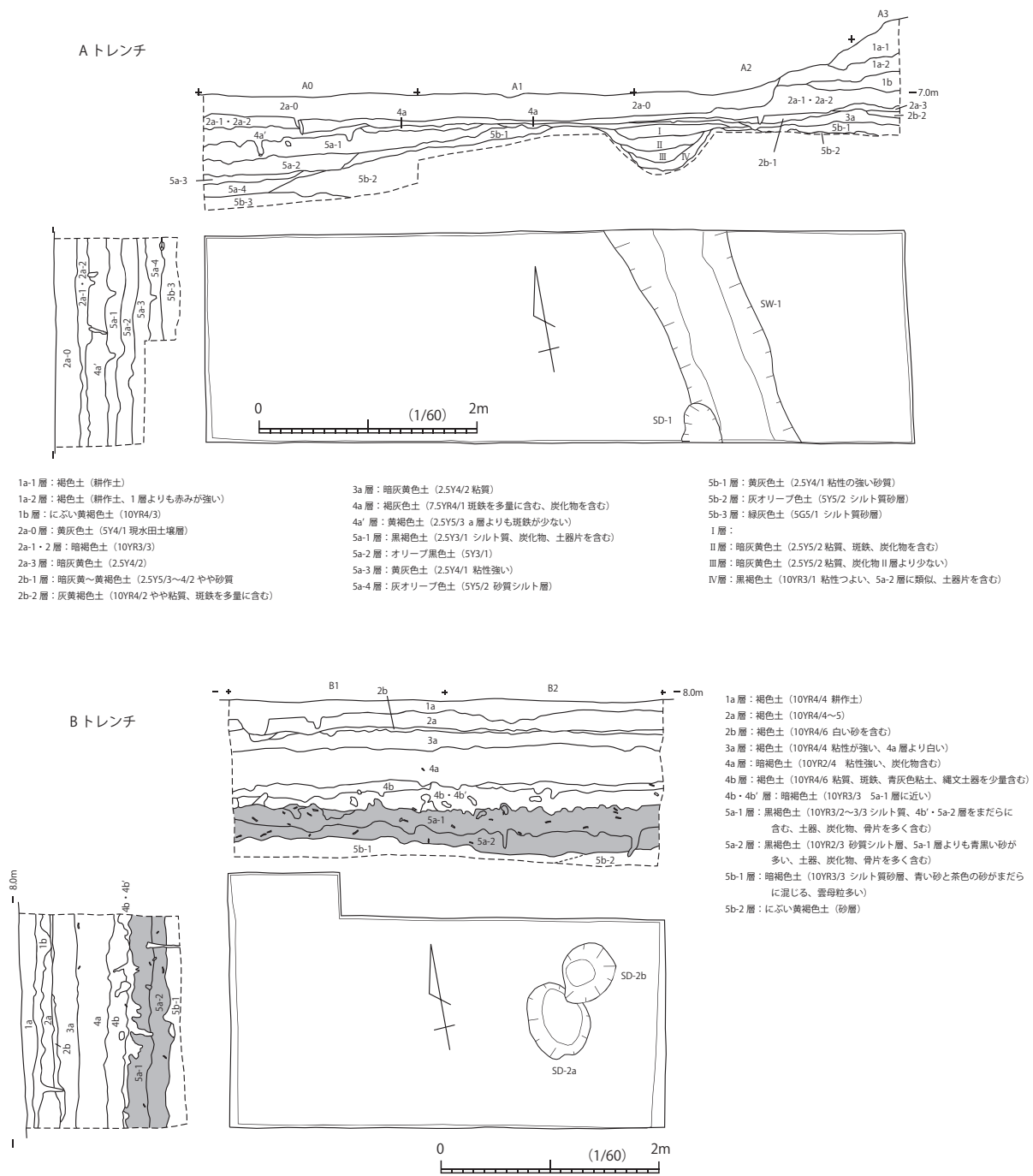


図5 馬見塚遺跡 H 地点土層断面図・遺構配置図（1：60）（設楽ほか 1995 より改変）

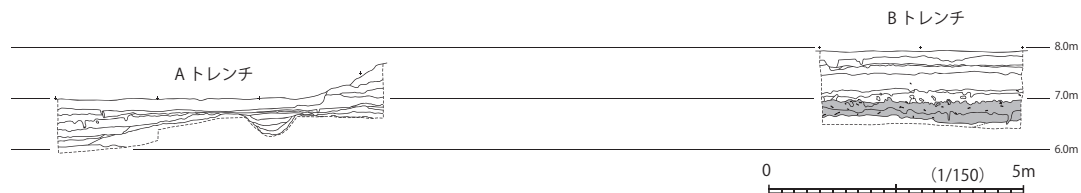


図6 馬見塚遺跡 H 地点調査トレンチ土層断面見通し図（1：150）（設楽ほか 1995 より改変）



図7 馬見塚遺跡調査区位置図（1：3,000）（岩野・能登 1975 に加筆修正）

では、南北方向に向かって伸びているこの溝を縄文時代にも遡り得るものとして含みを持たせてある。土層断面図を見ると、溝は自然堤防と後背湿地との境付近に位置しているようである。B トレンチの調査でも、大別層序は A トレンチのそれと対応する形で提示されているが、A トレンチの 5a 層とはかなり内容が異なるようである。こちらの 5 層は、地表下約 1m のレベルで 30～40cm の厚さがあり、土器・炭化物・骨片の包含が良好であったとある。（図 5・6）。検出遺構としては重複関係を有する土坑 2 基がある。縄文時代後期末の土器とともに、石冠・

焼けた石皿・石剣・焼骨・炭化種実が出土した。包含層からも、後期末～晩期初頭・晩期中葉・晩期末などの土器片や、打製石斧・石棒石剣類・土偶片が出土した。また遺跡を横断する 9ヶ所のボーリング試料の分析から、後背湿地の堆積層の形成年代と自然堤防上の縄文時代包含層の堆積レベルを知ることができた。

さて、以上の調査研究史の整理作業および先学諸氏によるご教示の結果、調査位置および検出遺構・特殊遺物出土位置などを一図面にまとめることができたので、ここに提示する（図 7）。（川添和暁）

3. 一宮市馬見塚周辺の表層地形解析

a. 方法

一宮市馬見塚地域がどのような場所に立地しているのかを明らかにするため表層地形解析を行なった。解析のために等高線図を作成した。等高線図の作成には「一宮市都市計画基本図(1/2,500)」の平成21年(2009年)修正版にプロットされた標高値を用いて鬼頭が作成した。

b. 表層地形の解析結果

東西4km、南北3kmの範囲において、等高線間隔0.2mで標高5.4mから標高10.6mまでの等高線が描ける(図8)。解析範囲の現在の状況は5つの河川(用水を含む)がそれぞれ北から南へ流れており、西から大江川用水、緑葉川、千間堀川、新般若用水、青木川となる。これらのうち緑葉川と千間堀川は解析範囲を越えてさらに南約500mで合流し、緑葉川となる。また、範囲の南東角の平島では新般若用水と青木川が合流し、青木川となって南へ流れる。西にはJR東海道本線、名鉄名古屋本線、名鉄尾西線が通り、東側には国道22号線が通る。今回対象とする一宮市馬見塚は緑葉川と千間堀川とに挟まれた場所にある。

解析範囲全体では北東側で標高が高く一宮市赤見(解析範囲はすべて一宮市内となるため、以下からは一宮市は省略する)、大赤見、小赤見で標高10mを超える。いっぽう、南西方向に向けて標高は次第に低くなり、大和町妙興寺では標高6mよりも低いところが見られる。解析範囲全体では北ないし北東方向に標高が高く、南ないし南西方向で低い傾向がある。

解析範囲を概観すると全体に複雑な等高線が描けるが、南北方向を向いたいくつかの谷地形が認められる。ここで馬見塚とその周辺地域に注目すると、馬見塚(標高8.0m)には標高7.6~7.8mに閉曲線で囲まれたくぼんだ地形が存在する。この地形の北側は浅野から馬見塚までに至る標高8.0~8.6mで距離約500mの尾根地形が接している。この尾根を挟んで西には標高9.4m付近の富士から印田通、相生を通り馬見塚へ向かう総延長約2kmの谷があ

る。この谷は富士から印田通までは北北東から南南西方向に流下するが、印田通において流下方向が変わり、相生から馬見塚まで北西から南東へ方向を変える。先の尾根地形の東には標高8.4mの浅野から馬見塚まで距離約500mの小さな谷がある。これら2つの谷がちょうど馬見塚において合流する形となる。

馬見塚の東には、これらのくぼ地や谷地形を境して、北の浅野からはじまり馬見塚、せんい、若竹、あずらに至る標高7.2~8.6mまでの総延長約1.9kmの尾根地形が認められる。この尾根地形は浅野から馬見塚までは東西方向の幅約80~200mほどであるが、馬見塚よりも南のせんいでは東西幅が急に広くなり、緩やかな傾斜となる。また、馬見塚の南にある森本では、この尾根地形から西方向に突きだした標高8.0~8.2mの舌状の地形がみられる。さらに、上述の尾根地形の東には、北の浅野から馬見塚、若竹、島崎、あずらを通る明瞭な谷地形が読み取れる。この谷地形は浅野から馬見塚付近までは南北方向を向いているが、さらに南のせんいにおいて東へ凸状に張り出して屈曲をしている。現在の千間堀川の流路はちょうどこの谷地形の中を流下している。

以上のように、現在の馬見塚地域は北西から南東方向に開口した谷と、北から南へ開口する谷とが合流する地点にあたっており、そこには閉曲線からなるくぼ地状の地形が現われた。このくぼ地を取り囲むように北、東、南を標高の相対的に高い尾根地形で囲まれている特徴をもつ。

c. 馬見塚遺跡周辺の地形的特徴

馬見塚遺跡周辺の地形の特徴をさらに詳細に、その成因も含めて考察をする。ここで注目するのは馬見塚地域が緑葉川と千間堀川との間に挟まれることである。馬見塚の東を流れる千間堀川は馬見塚を越えたあたりから、それまで北から南方向の直線状であった谷地形が北西-南東方向に変わり、せんいにおいて大きく東に凸の屈曲地形がみられる。また、等高線図に現われる谷地形と現在の千間堀川との流路とは、馬見塚周辺に限ってみると、ほぼ一致している。いっぽう、緑葉川は、解析範囲南の若竹から猿海道までは谷地形と現在の緑葉川の流路

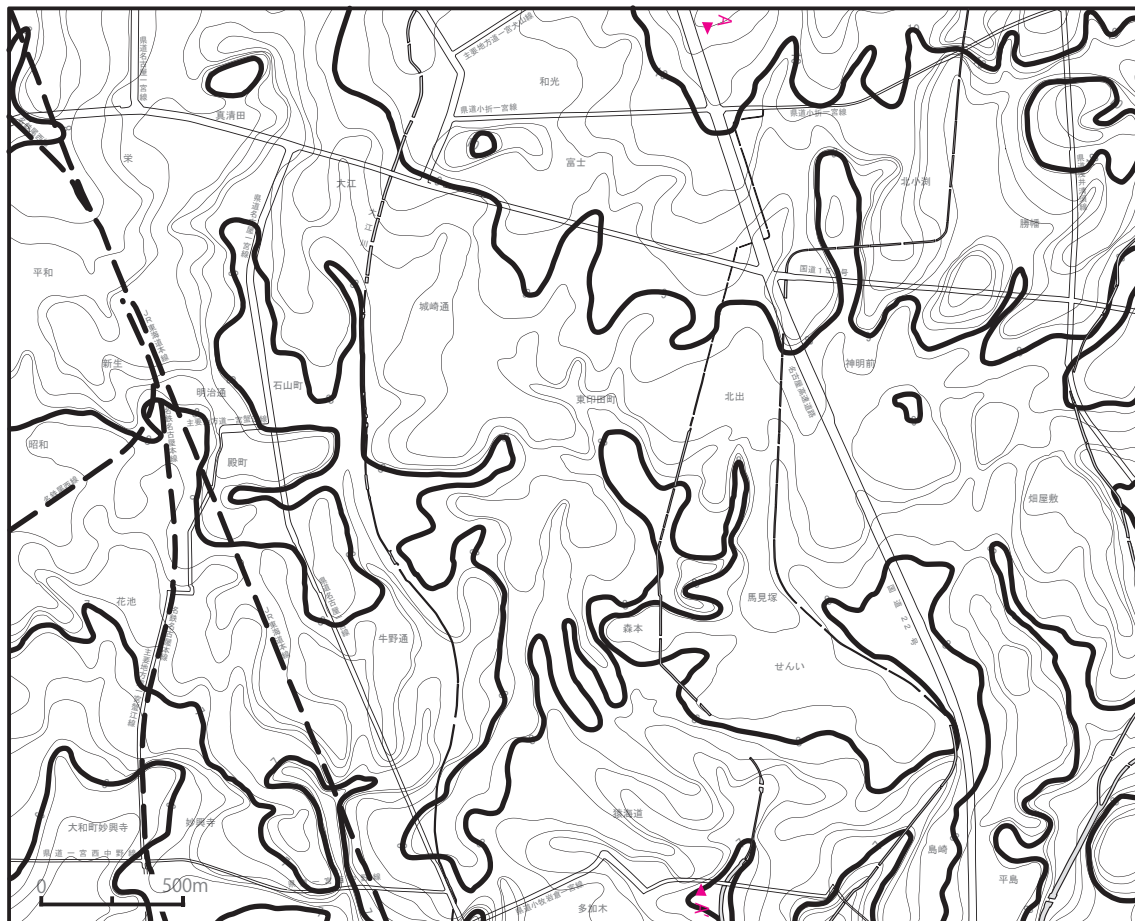


図8 馬見塚遺跡周辺の等高線図 A, A'は地形断面図(図10)を作成した端点を示す



図9 馬見塚遺跡周辺等高線図の拡大図

とが一致するものの、せんいよりも北側の流路は表層の地形とほとんど調和していない。これは、せんいよりも北側にみられる縁葉川の現在の流路が人工的に、現在の地形と斜交するように替えられてしまったものと考えられる。つまり、現在の縁葉川と千間堀川とはともに解析範囲の南側で東へ凸の屈曲した流路をもち、ともに並行しているが、それは縁葉川が人工的に改変された結果であると思われる。

そこで次に千間堀川の流路の特徴に注意してみよう。千間堀川は先にも述べたように、馬見塚付近を境にして北西 - 南東方向に流路が変化する。この傾向に合致するものとして、千間堀川の西側、せんいを挟んで約 1.3km に森本から猿海道に至る標高 7.2 ～ 8.4m の北西 - 南東方向の谷地形が認められる。現在、この谷地形の中を流れるような河川は見あたらないが、かつてはこの方向に谷地形内を流れる河川流路があったものと推定される。河川は標高の高いところから低いところへ流れることから、北西方向で標高が高く、南東方向に低い場所があることになる。馬見塚の北西側にも印田通から相生、馬見塚へ向かう北西 - 南東方向の谷地形が認められたことから、かつて馬見塚周辺には北西 - 南東方向に流路があった可能性がある。もしこの推定が適当であるならば、流下した流水は南の猿海道へと向かうであろう。いっぽうで、谷地形をはばむように馬見塚の南、森本には標高 8.0 ～ 8.2m の西へ突き出た舌状の地形があった。ここで、浅野からあずらまでの標高 7.2 ～ 8.6m の尾根地形をみると、馬見塚からせんい、森本にかけて東西方向に緩い傾斜面が広がる。馬見塚を含む南北断面図を作成してみると、北側の上流部の赤見から浅野にかけての傾斜面が、馬見塚付近で急に緩斜面となることがわかる（図 10）。上流部から運ばれてきた堆積物を含む流れが緩傾斜面に出会うと、そこで堆積物をためるようになる。馬見塚より南のせんいや森本でみられる緩く傾斜し東西方向の幅の長い地形は、堆積物がローブ状に広がった結果を見ているのかも知れない。森本の南にみられる標高 8.0 ～ 8.2m の軽微な谷地形は、この緩傾斜面に刻まれた谷のなごりとも思われる。

d. 表層地形の特徴と発掘調査地点との対応

馬見塚遺跡周辺の表層地形解析結果から、馬見塚北西にある富士から印田通、相生と通り馬見塚へと至る標高 8.0 ～ 9.4m の北西 - 南東方向の谷と、馬見塚の北側、浅野から馬見塚に至る標高 8.0 ～ 8.4m の南北方向を向いた 2 つの谷地形が、ちょうど馬見塚付近で合流する場所となっていた。その合流地点の馬見塚には標高 7.6 ～ 7.8m の閉曲線で囲まれた馬蹄形のくぼ地状の地形が現われた。このくぼ地の北、東、南の 3 方向を相対的に標高の高い尾根地形が取り囲んだ。特に浅野から馬見塚、せんい、あずらに至る尾根地形は、せんい付近で極めて緩傾斜となり、森本では西につき出た舌状地形を呈していた。このような地形的特徴と、一宮市などの過去の考古学的な発掘調査の結果とがどのように対応しているのか検討をしてみた。

対応をみるにあたり表層地形の解析結果の図に、考古学的な発掘調査が行なわれた図とを重ね合わせた（図 9）。これまでに発掘調査された地点は馬見塚からせんい、森本に至る場所で、現在の千間堀川の流路が東へ屈曲し始める地点の、西側に広がる場所にあたる。

発掘調査地点との対応を詳しくみると、増子 (1963) の Ma-A 地点は馬見塚にみられた標高 7.6 ～ 7.8m のくぼ地に向かって、西側へ舌状につき出た相対的に標高の高い場所にあたる。Ma-B ～ F 地点全体では富士から印田通、相生、馬見塚までの標高 8.0 ～ 9.4m の谷地形の中にあるが、先のくぼ地の西側緩傾斜面にあたる。Ma-I 地点は馬見塚、せんいの尾根地形の上である。

一宮市史 (1970) 掲載地点について、A 地点は増子 (1963) と同様に標高 7.6 ～ 7.8m のくぼ地に張り出した舌状地形の上にある。B 地点・C 地点は馬見塚からせんいに至る尾根地形の上にある。D 地点は森本でみられた西へ大きく張り出した舌状地形の上に、E・F 地点は馬見塚北西にある浅野から馬見塚へとつづく谷内にあり、くぼ地の西側の緩斜面にある。G 地点はくぼ地から尾根地形へと向かう傾斜変換域にあたっている。

一宮市範囲確認調査 (1975) の W-1 と W-3 はくぼ地の西側の緩斜面、W-2 はくぼ地の中

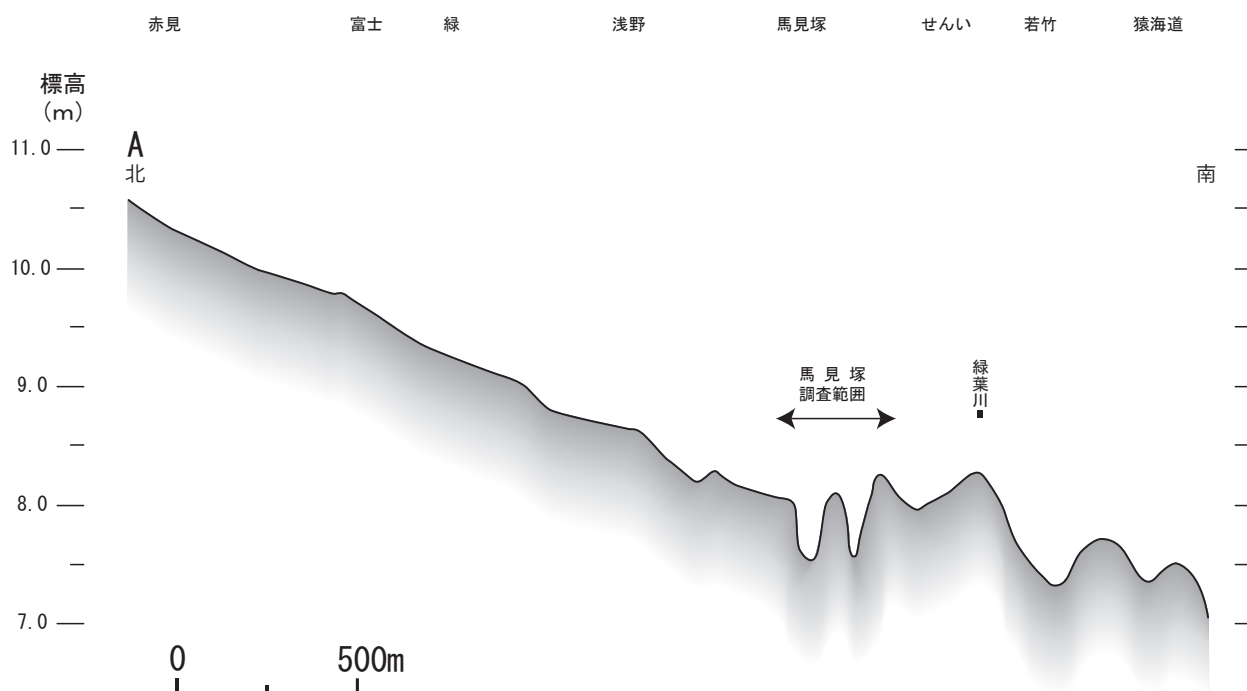


図 10 馬見塚遺跡地点を含む南北地形断面図 端点は図 8 を参照。

にある。W-4 と W-5 はくぼ地南西の標高の高い部分、W-6 ～ W-18 は森本にみられた舌状地形の北側縁辺の傾斜変換域に、W-19 ～ W-38 は森本の同じ舌状地形の南側縁辺にあたっている。E-1・2、E-5 ～ 7、E-10 ～ 13 はくぼ地の中にある傾斜面、E-36・37、E-45 も同じ位置にあり、上記以外の調査地点は馬見塚、せんいの尾根地形の上にあたる。

設楽(1995)の H 地点はくぼ地と尾根地形との境界付近にあたる。また、H 地点調査時ボーリング資料採取地点は、M-1・2 は森本の舌状地形の北側縁辺部、M-3・4 はくぼ地の中、M-5・6 はくぼ地から標高の高いところへ向かう傾斜面、M-7 ～ 9 は馬見塚、せんいの尾根地形の上にあたる。

e. 発掘成果と地形との対応関係と古環境の推定

つぎに考古学的な発掘成果と地形との対応関係をみる。地形的に馬見塚、せんい、森本にかけて認められた尾根地形のもっとも標高の高い場所からは遺物がみつかっておらず、概して地形の傾斜面に沿う形で良好に遺物の出土がみられるようである。特に標高 7.6 ～ 7.8m のくぼ

地の東側は多量の遺物と遺物包含層が良好な地点となっている(図 9)。

ところで、濃尾平野北東部には、犬山市を頂点とし南の標高約 10m 付近にかけて扇状地(犬山扇状地あるいは木曽川扇状地と呼称される)が広がる。一般に扇状地は頂点を扇頂、中央部は扇央、下流部を扇端とよび、扇頂では礫層が、扇央では礫層と砂層とが指交関係で重なり、扇端では粗粒な堆積物を覆ってシルト層や粘土層が卓越するようになる。馬見塚地域の標高は約 8m 前後であり、表層地形解析でも述べたように北の赤見から浅野にかけての傾斜面が馬見塚において緩傾斜となっており、ちょうど扇状地の扇端部にあたっている。設楽(1995)の H 地点調査時ボーリング資料採取地点により提示された地下柱状図によれば、各地点全体を通して下部には砂層が堆積し、上部にはシルト層や粘土層といった細粒な堆積物が厚く覆っており、先に述べた扇状地扇端部における層相の特徴をもっていた。一般に、現世の扇状地扇端部では地下水位が高いため湧水量が多く、自噴したり、泉となって良質な水が得られる。そのため地理学的には集落が成立し、湧水を利用した

表1 馬見塚遺跡各調査地点の概要一覧

調査地点名	調査の原因	検出遺構など	遺物の所属時期など							出土土器など	土器以外出土遺物	備考
			I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	VI期			
A地点	土取りに発見	土器棺墓【合口含む】		?	?	●	?			晩期後半		
B地点	土取りに発見								●	須恵器・土師器	滑石製模造品（管玉・白玉・勾玉・剣形・有孔円盤）・土製模造鏡・土鈴・刀子・鉄鏃・ガラス小玉	旧字 三反田
C地点	土取りに発見	土器棺墓【合口】				●						
D地点	土取りに発見	包含層	○		○	○	○			宮滝式～寺津式・五貫森式・馬見塚式・遠賀川系	石鏃	伊勢型鍋出土
E地点	土取りあとに発見	包含層				●				縄文時代晩期後半	打製石斧・凹石・軽石製品	
F地点	土取りに発見	土器棺墓・ビットor土坑（焼人骨含む）・炉跡【礫敷】・地床炉跡?・溝状遺構・包含層		○	○	●	○			晩期前半・五貫森式（古）・馬見塚式	石鏃・石錐・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・凹石・切目石錘・土偶・石棒石剣類・石製垂飾・赤色顔料用の磨石?・骨鏃	土器群は五貫森式古段階の指標として示されることがある。
G地点	土取りに発見											
H地点・Aトレンチ	学術調査	溝（時期不詳）・包含層				○		○		五貫森式など・榎王式		
H地点・Bトレンチ		土坑・包含層		○	○	○	○	○		寺津下層式・寺津式・稲荷山式・西之山式・五貫森式・馬見塚式・榎王式・遠賀川系	打製石斧・石皿・土偶・石棒石剣類・石冠	
(旧)ハッカ地点	土取りに発見	包含層	●	○			○			宮滝式・寺津下層式ほか	石鏃・剥片・打製石斧	ハッカは旧字名
Ma-A地点	水田化に伴う土取り			○	○	○	○			下別所式～馬見塚式		
Ma-B地点	水田化に伴う土取り	土器棺墓【合口】・包含層				●				五貫森式など		
Ma-C地点	水田化に伴う土取り		○	○		○	○			宮滝式・寺津式・五貫森式・遠賀川系		
Ma-D地点	水田化に伴う土取り				○					稲荷山式単純		
Ma-E地点	水田化に伴う土取り					●				西之山式/五貫森式		
Ma-F地点	水田化に伴う土取り						●	○		馬見塚式（少量の遠賀川あり）		
Ma-G地点	水田化に伴う土取り											H地点南東にあたる
Ma-H地点	水田化に伴う土取り											H地点南東にあたる
Ma-I地点	水田化に伴う土取り	溝状遺構【北東-南西方向】		●						又木式		

※（旧）ハッカ地点の詳細な内容は岩野見司氏のご教示による

※Ma-A～i地点の詳細な内容は増子康真氏のご教示による

水田も多い。馬見塚には標高 7.6～7.8m にくぼ地が認められた。扇状地扇端部にあたるこのくぼ地が湧水の噴出するような泉であった可能性もある。また、このくぼ地は北、東、南の3方向を尾根地形により取り囲まれる特徴をもっていた。泉を利用する者にとっては利便性の高い場所であったとも推定でき、一宮市範囲確認調査（1975）においてくぼ地の縁辺にあたる範囲で多量の遺物の出土と良好な遺物包含層との記載があることも調和的である。

簡単にまとめれば、馬見塚地域は扇状地の扇端部に位置している。扇状地扇端部は湧水池となることが知られており、尾根地形により周りを閉じられた場所が泉となり、その湧水池に馬見塚遺跡を形成した人類活動があったものと推定できる。

本論では表層地形解析によって現われた地形のみをたよりに、馬見塚遺跡の地形の特徴や成因の論を進めた。上で述べたことが妥当かどうかは、周辺での層序の確認や年代測定などのデータの集積が必要である。いずれにせよ、本論が馬見塚遺跡を考える上での基礎データとなれば幸いである。（鬼頭 剛）

4. 考古資料出土傾向との対比

ここで、より詳細に出土資料の時代・時期と内容との対応関係について確認したい。但し、ここでは、調査区内の様相がより明らかとなっている、A～H地点およびMa-A～Ma-I地点についてにのみ取り上げる。

表1は、上記調査・遺物採集地点における、時期と確認遺構をまとめたものである。出土土器の所属時期から、I期：後期後葉（宮滝式および併行期）・II期：後期末～晩期前葉（寺津下層式～又木式期）・III期：晩期中葉（稲荷山式期）・IV期：晩期後半（西之山・五貫森式期）・V期：晩期末（馬見塚式期）・VI期：弥生前期・VII期：古墳時代の7時期に分けた。この時期別に出土土器の傾向をまとめると以下のようになる。

I期・後期後葉は、D地点・Ma-C地点での出土が確認されている。また、（旧）ハッカ地点でもまとまった出土の報告がある（岩野1985）。

II期・後期末から晩期前葉になると、H地点BトレンチやMa-A地点・Ma-I地点で出土確

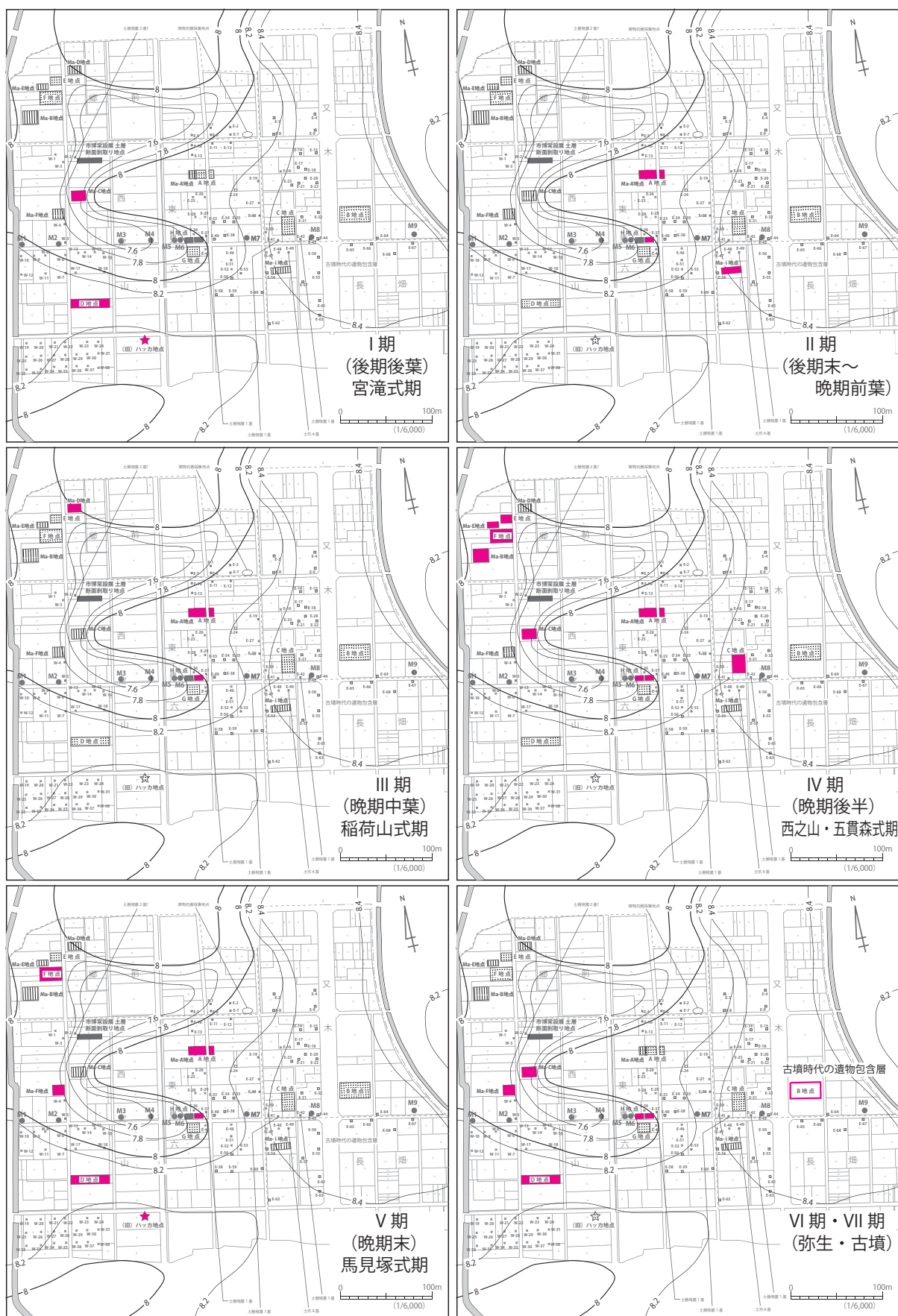


図 11 馬見塚遺跡の変遷 (1:6,000) (赤色は該当期の遺物が出土した地点を示す)

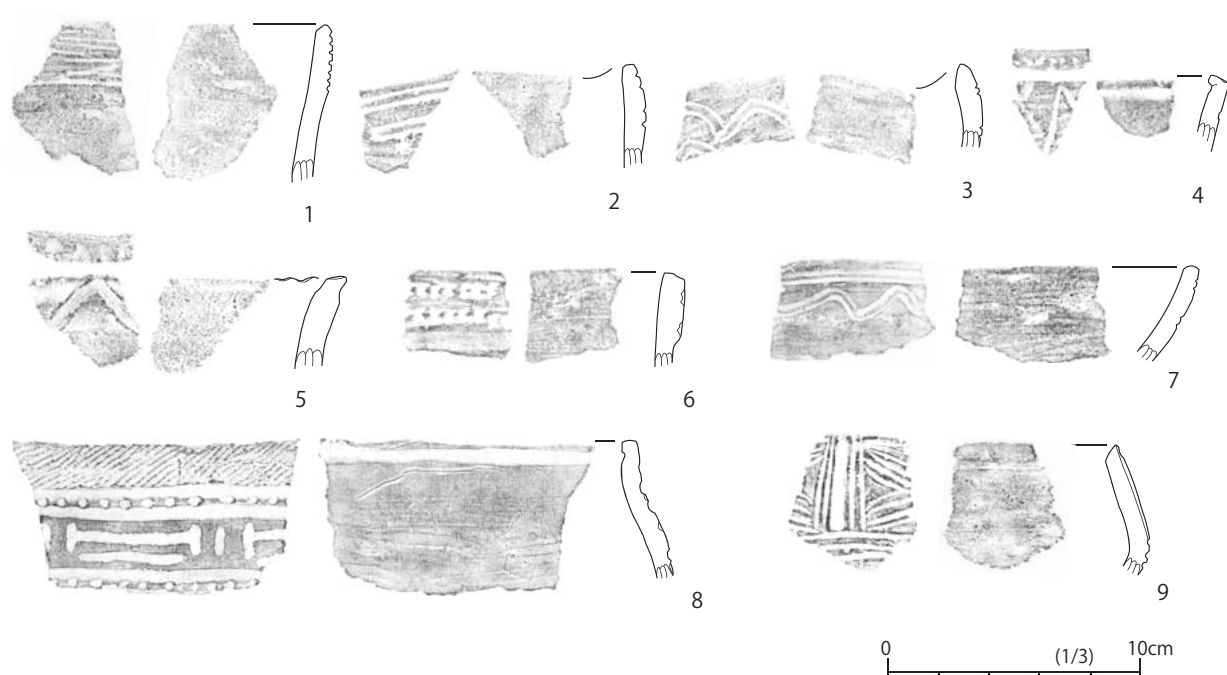


図 12 馬見塚遺跡出土晩期前半土器



写真 1 馬見塚遺跡の現況（左上：北西より、右上：A 地点の石標、右下：遺跡中央より北東を望む、左下：遺跡中央より北西を望む）
2012 年 1 月 9 日・3 月 4 日 筆者撮影

認されており、A 地点も同様であると推定される。

Ⅲ期・晩期中葉の稲荷山式期は、Ma-D 地点でこの時期に限定されるようである。Ma-A 地点・H 地点 B トレンチでも出土が確認されている。

Ⅳ期・西之山式期および五貫森式期は、A・C・D・E・F・H・Ma-A・Ma-B・Ma-C・Ma-E の各地点で見つかり、最も広く確認できる時期である。

V 期・晩期末の馬見塚式期は、A・D・H・Ma-A で確認されており、Ma-F 地点では馬見塚式期がまとまる状況という。

Ⅵ期・弥生前期は、D・H・Ma-C・Ma-F の各地点で確認されている。

Ⅶ期・古墳時代は、B 地点で良好に確認されているが、その他の地点で濃厚に確認されている場所は認められない。

この時期別出土傾向の変遷を示したものが、図 11 である。I 期は、くぼ地南側の舌状地形の頂部および南への緩斜面上に集中する。くぼ地内中央、Ma-C 地点でも当該時期の遺物出土が確認されているが、当地は西側に張り出す舌状の高まりの先端部で、高まりからくぼ地への傾斜面であるとも言える。Ⅱ期になり、くぼ地東側の尾根上に遺跡形成の中心が移ってくる。ここは、表層地形解析後の等高線 8.4～8.0m の範囲にあり、東から西（くぼ地）に向って傾斜する地形が、一段下がって緩やかになった高まり上にあたる。遺跡中央の凹地周辺の遺跡形成が開始される。Ⅲ期になると、くぼ地東側に加え、くぼ地北西側でも活動が開始される。北西側はやや低く、表層地形解析後の等高線 7.8～8.0m の範囲の平坦地となっている。この傾向はⅣ期になるとさらに顕在化する。北西側での遺跡形成活動が活発になる一方で、くぼ地東側でも、東側に向ってさらに一段上の高まり西側端部にまで、活動範囲の広がりが認められるのである。Ⅴ期になると、くぼ地東側・北西側とともに、くぼ地西側・南側での活動へと移ってくる。そして、この構図はⅥ期へと引き継がれ、遺跡形成の主体はくぼ地の南側へと移ってくるのである。Ⅶ期の遺物が確認された B 地点は、遺跡東端の尾根地形頂部に当たる。この

区域には縄文時代・弥生時代の遺跡形成が全く認められないことは、極めて注目できる事象である。

以上のことから、次のようにまとめることができる。

1.I 期～V 期にあたる、縄文時代後期後葉～晩期末・弥生時代にかけては、平面形状での字状を呈するくぼ地の周囲で、遺跡形成活動が認められる。

2.I 期後期後葉にくぼ地南側から遺跡形成が始まり、東側・北西側・西側・南側へと活動の変遷が確認できる。

3.くぼ地東側、西側に舌状に伸びる地形上では、Ⅱ期後期末から遺跡形成が始まって以降、Ⅴ期に至るまで、継続して活動痕跡が確認できる。

4.3 に関連して、Ⅲ期・Ⅳ期になると、くぼ地東側と北西側の 2ヶ所で遺跡形成活動が活発になり、Ⅴ期はこれに加えて南側でも活動が認められるようになる。

5.ての字状のくぼ地を望まない、馬見塚遺跡東端の高まりには、縄文時代・弥生時代の痕跡は認められない。しかし、古墳時代になると祭祀場として当地が選地されたようである。

縄文時代当時のヒトたちの、ての字状のくぼ地への意識は、一貫して極めて高かったことは確実である。その理由として、上で鬼頭が論じたような湧水の存在は魅力的な説である。

また、くぼ地を挟んで 2ヶ所で同時に遺跡形成活動が行われるようになった、Ⅲ期・Ⅳ期の様相は極めて示唆的である。それぞれが各小集団に対応するならば、Ⅲ期以降は、2つの小集団による活動が行なわれていた可能性も想定し得るかもしれない。その場合、さまざまな角度から、くぼ地東側と北西側との様相の比較・検討を行うことが必要となるであろう。

5. 総括と今後の課題

以上のように、馬見塚遺跡内における遺跡形成の様相は一樣ではなく、時期によって形成域が移りながら、結果的に全体に広く痕跡が残されていることとなった事情が明らかとなった。その形成には、地形の変換点・凹地および湧水地の存在など微地形の様相が大きな要因として認められる。特に注目できる点としては、縄文後期後葉から一貫して、くぼ地を意識した遺跡形成活動が行なわれたこと、Ⅲ期以降はくぼ地を挟んで形成箇所が2ヶ所であること、くぼ地東側での形成は、Ⅱ期以降、繰り返して行なわれていることなどある。

今回は、これまでの調査研究成果を集約して、いわば大まかな時期的変遷という基礎的内容を提示し得た。今後、さらに出土遺物の調査を継続して行う必要がある。出土土器の様相は言うまでもないが、石器の出土状況も併せて検討を行なう必要がある。馬見塚遺跡全体の遺跡

構造についてのより詳細な検討は、上記のような次の段階の基礎的作業を経た上で、再度行ないたいと考えているのである。(川添和暁)

謝辞

本稿を草するにあたり、以下の方からの多大なご教示・ご助言を賜った。ここに感謝の意を表する次第である(五十音順・敬称略)。

岩野見司・久保禎子・設楽博己・土本典生・永井宏幸・増子康真・松本 彩

岩野見司先生におかれましては、(旧)ハツカ地点の資料実見の機会と、遺跡現地でのさまざまな貴重なご教示を賜ることができた。特にお礼申し上げる次第である。

また、増子康真氏にも、調査・採集地点など極めて具体的にご教示を頂けた。併せて特別にお礼申し上げたい。

鬼頭分担部分について、図面作成では整理補助員の鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 井関弘太郎,1963「浅井古墳群付近の地形・地質」『新編一宮市史 資料編三 浅井古墳群』37～42頁。一宮市。
- 井関弘太郎,1978「一宮の地形と地質」『新編一宮市史 本文編上』3～40頁。一宮市。
- 岩野見司,1973「馬見塚遺跡」『日本古代遺跡便覧』116頁。東京 社会思想社。
- 岩野見司,1978「馬見塚遺跡—後期・晩期の文化—」『新編一宮市史 本文編上』64～76頁。一宮市。
- 岩野見司,1985「愛知県 馬見塚遺跡」『探訪 縄文の遺跡 西日本編』82～87頁。東京 有斐閣。
- 岩野見司,2002「馬見塚遺跡」『愛知県史 資料編1 考古1 旧石器・縄文』60～65頁。愛知県。
- 岩野見司・能登 健,1975「馬見塚遺跡範囲確認調査報告」一宮市教育委員会。
- 上羽貞幸,1926「尾張國西成村の遺跡に就いて」『人類学雑誌』41-8.430～431頁。東京人類学会。
- 大場磐雄,1938「尾張馬見塚探査記」『考古学』9-5.236～237頁。東京考古学会。
- 大参義一,1972「縄文式土器から弥生式土器へ—東海西部の場合—(1)」『名古屋大学文学部研究論集』LVI.159～192頁。名古屋大学文学部。
- 小栗鉄次郎,1942「一宮市馬見塚遺物包含地」『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』20.23～49頁。愛知県。
- 紅村 弘,1963「東海の先史遺跡 総括編」名古屋鉄道。
- 設楽博己ほか,1995「東日本における農耕文化成立の研究—愛知県一宮市馬見塚遺跡H地点の発掘調査—」国立歴史民俗博物館考古研究部。
- 澄田正一・大参義一・岩野見司,1967「新編一宮市史 資料編二 弥生時代」一宮市。
- 澄田正一・大参義一・岩野見司,1970「新編一宮市史 資料編一 縄文時代」一宮市。
- 澄田正一・大参義一・岩野見司,1974「新編一宮市史 資料編四 古墳時代・古代」一宮市。
- 永井宏幸,1994「馬見塚遺跡」『考古学フォーラム』5.52～53頁。考古学フォーラム編集部。
- 林 魁一,1927「尾張國丹羽郡西成村大字馬見塚発見の石器及彌生式土器」『人類学雑誌』42-2.58～62頁。東京人類学会。
- 増子康真,1963「愛知県馬見塚遺跡の縄文土器について」『考古学手帖』19.6～8頁。東京。
- 増子康真,1965「尾張における縄文晩後半期土器の編年の研究—馬見塚遺跡の所見を基に—」『古代学研究』40.1～10頁。古代学研究会。
- 増子康真,1981「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階 本文編・補足改訂版』42～97頁。名古屋。(初版1975)
- 増子康真,2003「愛知県西部の縄文晩前土器型式の推移」『古代人』63.15～47頁。名古屋考古学会。
- 森 徳一郎,1929「尾張馬見塚遺物の真相(一)」『考古学研究』3-1.29～32頁。考古学研究会。
- 森 徳一郎,1931「尾張馬見塚遺物の真相(二)」『史蹟名勝天然紀念物』6-7.552～563頁。史蹟名勝天然紀念物保存協会。
- 渡辺 誠編,1975「桑飼下遺跡発掘調査報告書」平安博物館。
- 渡辺 誠,1978「近畿縄文時代の遺跡と遺物(5) 低地の縄文遺跡」『古代文化』30-2.37～43頁。財団法人 古代学協会。